

さよなら原発 1000 万人アクション 「9・19 明治公園5万人集会でのステージアピール」

◎ 実行委員

皆さん3月11日の大震災による福島第一原発の事故は今も続いています。そして私たちは毎日毎日命が脅かされて暮らしています。この夏の節電キャンペーンはみんなの努力で乗り越えました。このことは、原発が無くても電気が足りていると言うことが証明されたのではないのでしょうか。今原発無しで暮らしたいと言うのはこの国で暮らしている多くの人の声になっていると思います。こうした時に出された9人の方々のよびかけは、原発廃止というさまざまな運動の軸になってきていると思います。

◎ 鎌田慧さん

皆さん。全国から集まってくださった皆さん、全国から集まれなかった皆さん、全ての皆さん。私たちは今日ここに5万人集会を成功させることが出来ました。厳密に言いまして4万人は突破しています。ありがとうございます。今日の集会はこれまでの集会のひとつの結節点であります。そしてこれからはじまっていく集会の出発点でもあります。皆さんまだ一千万人署名は始まったばかりです。今日現在100万人は突破しています。しかしあと900万あります。これを皆さんがんばりましょう。そして1000万の声を脱原発に向けて突きつけましょう。

野田首相はこれから国連に行つて、原発の安全性を高めて再開していくと言うことを演説するというふうに発表しています。しかし安全性と信頼性は既に破綻しております。それでもなおかつ再開すると言うのは人民に対する敵対であります。今日本人の8割に及ぶ人たちは原発はいやだ、もう原発を辞めてくれ、原発のない社会に行きたいと言っております。その声を無視して政治が出来るわけがありません。

これまで、どのくらいの被曝者が発生しているのか。そして現在、被曝労働者がどれだけ発生しているのか。これから判ります。しかしその恐ろしい結果を私たちは認めなくてはなりません。そしてその救済を少しでも強くはじめていかななくてはなりません。そういう意味でも今日の集会を力強く終わらせることによって救済運動も、進めていきたいと思っています。

原発から脱する。脱原発運動は、文化革命であります。意識を変えてゆく運動でもあります。皆さん、核に依存して生きることは、人類はできない。核と人類は共存できないということは、ヒロシマナガサキ、そして今度のフクシマの事故でも証明されています。どうしてこれ以上の犠牲者をつくることができますでしょうか。私たちは原発にさよならを言います。サヨナラは、サイジェンとかオブワールとか「またあう日まで」のさよならではない。「もう会わない、会いたくない」アデューというのが原発に対する私たちのメッセージです。もう原発のある社会はいらない。そしてこれから子供たちに平和な幸せな社会を残す。そのためにこそ頑張っていこうではありませんか。これから一千万署名にみなさん頑張ってください。そして来年3月24日集約集会を開きます。一千万署名の集会を日比谷野外音楽堂で開きます。それまで皆さん頑張ってください。そしてその間にも講演会とか音楽会とかいろいろなことを考えています。皆さんからのアイディアも募集します。みなさん、一緒になって頑張りましょう。

◎ 大江健三郎さん

2つの文章をひいてお話しします。まず第一は私の先生の渡辺一夫さんの文章です。

狂気なしでは偉大な事業はなしとげられない、と申す人々もいられます。それは嘘であります。狂気によってなされた事業は必ず荒廃と犠牲を伴います。真に偉大な事業は狂気に捉えられやすい人間であることを人一倍自覚した人間的な人間によって誠実に地道になされるものです。

この文章は今、次のように読み直されうるでしょう。原発の電気エネルギー無しでは偉大な事業はなしとげられないと申す人々もいられます。それは嘘であります。原子力によるエネルギーは必ず荒廃と犠牲を伴います。

私が引用します第二の文章は新聞に載っていたものです。原子力計画を止めていたイタリアが、それを再開するかどうか国民投票した。そして反対が9割を占めました。それに対して、日本の自民党の幹事長がこう語ったそうであります。「あれだけ大きな事故があったので集団ヒステリー状態になるのは心情として判る」。

偉そうなことを言うものでありますが。もともとイタリアで原子力計画が一旦停止したのは、25年前のことです。チェルノブイリ事故がきっかけでした。それから長く考え続けられた上で、再開するかどうかを国民投票で決める。そういうことになった。その段階でフクシマの事故が起こったのであります。

今の自民党の幹事長の談話の締めくくりはこうです。「反原発というのはかんたんだが、生活をどうするのかとすることに立ち帰った時、国民投票で多数が原発反対だからやめましょうという簡単な問題ではない」そう幹事長は言いました。原発の事故が簡単な問題であるはずはありません。フクシマの放射能物質で汚染された広大な面積の土地をどのように剥ぎ取るか、どう始末するか。すでに内部被曝している大きい数の子供たちの健康をどう管理するか。

今まさにはっきりしていることはこうです。イタリアではもうけっして、人間の命が原発によって脅かされることはない。しかし私たちは、私たち日本人はこれからさらに、原発の事故を恐れなければならないということです。

私たちはそれに抵抗する。その意志を持っているということを、先のように想像力を持たない政党の幹部とか、また経団連の実力者達に思い知らせる必要があります。そのために、私たちになにができるか。私たちには、この民主主義の集会、市民のデモしかないのであります。しっかりやりましょう。

◎ 内橋克人さん

今日は福島はもとより、下北半島の先から日本中から世界からたくさんの方があつまってくださいました。ありがとうございます。この感謝の言葉は、今生きている私たちだけではありません。これから生まれて参ります、20年30年100年先のわたくしたちの幾世代もの子孫の人々の感謝の言葉であろうと思います。ありがとうございます。まだ此の世に生を受けていない人々もあわせて、深く皆さんがたに敬意を表し、ありがとうございますと、おっしゃっている。必ずそう言う時代が来ると私は信じています。

一つだけ注意をしなければならないことがございます。それは、新しい原発安全神話。原発安全神話の改訂版。

新版。これが台頭しつつあるということです。つまり技術が進めば、発展すれば、安全な原発は可能である、安全な原発は可能であるという、こうした安全神話の改訂版。新たな装いを凝らして台頭しつつあります。たとえば地下深く原発を埋め込んで、洞窟の中で原子力発電を続ける。こういう企み、こうした計画が進んでいるということでもあります。地下洞窟。穴に原発エネルギーを作る装置を埋めて、なおかつ原発を持ち続けたいというこの意図の裏になにがあるかです。それは私たちの国が、核武装、核でもって再武装することが可能な、そういう潜在力を持ち続けようと、そうした意図であると思われます。

合意なき国策がここまで進んできました。幾度も幾度も私たちは打ちひしがれた経験、これを生かさなければなりません。原発エネルギーではなくて、命のエネルギー。命のエネルギーが耀く、そういう国にしようではありませんか。今日その一歩が踏みだされます。世界が変わると思います。さようなら原発。こんにちは、命耀く郷里。その第一歩を皆さん方と共に歩きたい。そういうふうに私は喜びと共にお話しをさせていただきました。ほんとうにありがとうございます。

◎ 落合恵子さん

こんにちは。あなたに会えて本当に良かったです。でもこの逢えたきっかけを考えると、腹立たしくて腹立たしくてしかたありません。この腹立たしさを、新しい力にかえて、あしたを変えてゆきたいと思います。

私たちの、これはわたしの世代ですが、ビートルズの歌を歌って育ちました。そのビートルズの歌に、イマージンという歌があります。想像してごらん、という歌です。

想像してください。子どもはどの国のどの社会に生まれるかえらぶことはできないのです。そして生まれてきた国に原発があって、この暴走があったことが今の私たちの社会です。

想像してください。福島それぞれの子供たちの今を。そしてこの国のそれぞれの子供たちの今を想像してください。スリーマイル島。チェルノブイリ。そしてフクシマ。あの原発大国フランスでも、ついこの間核施設の事故があり、ほとんどの情報を私たちは手に入れられない現実を生きています。今度はどこで、次は誰が犠牲になるのかと、そのストレスを絶え間なく抱いて、生きていくのはもう嫌だ。私たちはそれぞれ叫んでいきたいと思っています。放射性廃棄物の処理能力も持たない人間が原発を持つことの罪深さを私たちは叫んでいきましょう。それは命への、それぞれのじぶん自身を生きていこうという人への、国家の犯罪なのです。容易に核兵器に変わりうるものを持つことは、恒久の平和を約束した憲法を持つ国に生きる私たちは決して許容してはならないはずです。

想像してください。まだ、ひらがなしか知らない小さな子どもが、夜中に突然起きて「ほうしゃのうこないで」と泣き叫ぶような社会をこれ以上続けさせてはいけないはずです。私は私たちは、皆さんも、この犯罪に加担しないとここでもう一度自分と約束しましょう。原発という呪詛から自由になること。もちろん反戦反核反差別はぜんぶ一つの根っこです。「命」ここからはじまります。

今函館で、大間原発をあの海を見ながら、函館の駅に向かって歩いている、大きなグループがいます。大間原発反対運動で来られた方、今ここにいらっしやいますね。あるいは昨日オーストラリアから帰国した順子さん、どこかにおられるでしょう、ありがとうございます。世界から原発と核が消える私たちのゴールに向かって歩みま

しょう。暴力に対して私たちは非暴力を貫きます。けれども諦めません。忘れません。歩き続けます。この一つのウォークを、怪我人ゼロ。熱中症ゼロ。もちろん逮捕者ゼロで歩き抜きましょう。おねがいします。

◎ 澤地久枝さん

こんにちは、みなさんよくいらしてくださいました。こんなにおおぜいのかたが参加してくださってどれだけうれしいでしょう。最初の記者会見のあと私は姿を消していました。(壇上でよろめかないないよう介助する鎌田慧さんと落合恵子さんに対して) だいじょうぶよ、一人で立ってる。膝の骨折とそれから手術と言うことで50日あまり入院をしたんですね。家へ帰ってからも足腰が萎えて回復がとても遅かったと思います。しかし今日どんなことをしても立って参加しようという意志が私を立ち上がらせ歩かせたのだと思っています。

昭和の時代には15年に及ぶ戦争の日々があり沖縄戦とヒロシマナガサキへの原爆投下の果てに敗戦を迎えました。人類は日本ではじめて原爆を体験したのです。日本は実験場だったと思ったほうが良いと私は思います。その日本に、54基もの原発ができ、フクシマの事故から半年たっても終息の手立てが無いことは原発の本質と歴史の痛烈な啓示をしめしてはいないでしょうか。この国は原発などを持つてはいけない国だったはずですよ。

核が暴走しはじめてしまったら、人類はその暴走を止めたりコントロールするノウハウをまだ持っていないんですね。そう言う危険なものは地球には必要ないと思います。日本だけが脱原発では済みません。放射能は海を越え国境を越えて広がっていきます。これは防ぎようがないのです。

原発を含む日本の電力会社は過去何十年か抜群の大スポンサーでした。どこに対するスポンサーであったかはあえて言いません。皆さんよくご存じだと思います。何百億円という現金が原発の安全性PRと推進のために使われその毒はひどく広がったようです。事故の直後から原発や東京電力批判を差し控え暗に原発擁護の言説が大手を振ってまかり通っています。とくにテレビを観てください。ひどいものだと思います。

東京電力が役所に最近提出した報告書類は、本文のほとんどが抹消の黒線で消されていました。なんと無責任な姿勢なのではないでしょうか。事故直後、年間被曝許容量の数値を大きく変えた政府発表は以後の発表に深い不信を抱く原因を作ったと思います。その限量さえ超えて事故現場で働く作業員の生命は誰が保証するのでしょうか。多くは下請けの労働者なのです。

東北はいつもいつも……歴史上、棄民の危機を乗り越えてきた、ひどい苦難を受けてきたと思います。我が子の健康を案じ住むべき場所食べさせるものに悩む母親たちがいっぱいいます。事実を知りたいと彼女たちは望んでいます。知らなくては対応のしようがないんです。原発を無くしたら電気が不足し日本経済は成り立たず、雇用が減り失業率が増え貧しい二重三重苦の国になる、展望を失った暗い社会が訪れると威嚇混じりの原発擁護がおおっぴらに語られるようになりました。しかし就職難不景気、萎縮しがちな世相は原発事故以前から慢性症状としてあったのではありませんか。今ここで全て原発に帰納してだから原発が必要だという考え方は何処かですり替えが行われています。嘘があります。

私たちは政治不在の社会を変えようとして政権交代を実現させましたが、しかしですね、政治不信が生まれるのは自然なことです。しかし結末は、結果は私たちに帰ってきます。希望とは道を見出すべく残されているのは自覚し考える個の確立と個と個の連携その広がり、つまりは市民運動ではないでしょうか。今日の集会のこの盛

況また一千万市民の原発さよならの署名は、私たちが求める新しい国作り世直しに道をひらくと思い、私はここに希望を繋ぎます。同時に、今回の原発事故の原因と経過の真相究明を徹底させたい。政府と東電の秘密主義は原発事故に限らない、この国の悪しき体質を反映しているからです。

今日おいでになっている、特に女性の方達に語りたと思います。日本では戦後からきょうまで一人の戦死者もいなかったのは、二度と戦争をさせないと決心した、戦争を体験した日本の女たちの力だと思います。地球と命を守り平穏な未来を確保するべく命と命を産み育む女性達が役割を果たすべき時が今です。血縁を問わず国境を越えて命を守る戦いにはその夫、恋人、友人達も戦いの同志に連なるでしょう。そのまわりには私のような高齢の思いを同じくする人間がいることを確かめ合って進んでいきましょう。「老若同盟」と亡くなられた加藤周一さんがおっしゃいましたが、老若男女を問わぬ人間の砦を築いていきましょう。ここで私たちは負けるわけにはいかないのです。みんなで力を合わせて頑張っけてゆきたいと思います。今日はありがとうございました。

◎ 国際的環境ネットワーク FOE のドイツ代表フーベルトバイガーさん

こんにちは。親愛なる皆さん。フクシマ事故が半年後のこの記念すべき集会で話させていただくことを光栄に思います。このような計り知れない影響を与える原子力事故が日本で起こったことにドイツでもわたしたちはたいへんに衝撃を受けています。何十年来、反原発で闘ってきた、ドイツの何百万人も市民から、みなさんに連帯の挨拶をしたいと思います。

フクシマの事故は世界を変えました。この原発事故は原子力発電がどんな国に於いてもまたどんなシステムに於いても私たちの社会に計り知れない影響を与えるもの、とても制御ができないものと言うことを証明しました。この事故は同時に、政府も企業も、このような計り知れない影響のもとになす術もないと言うことを明らかにしました。チェルノブイリ事故から25年、私たちドイツそしてヨーロッパの人々も知っています。政府そして原子力産業が、何万人もの死者を前にしてもなお、この事故について小さく見せよう、隠そうとしていることを。そして今もそれが続いているということ。

しかしこの事故はドイツやイタリアなどヨーロッパの国にも大きな変化をもたらしました。ドイツでは、事故のあと、今日ここにあるような大きなデモが起こり、ついに政府は8基の原子力所を停止し、さらにその他の発電所についても、2022年までに停止することを決定しました。すなわち、2022年に最大の産業国の一つが、脱原発を実現するのです。

脱原発はもはや出来るか出来ないかの問題ではありません。政治的にやるかやらないかの問題なのです。今私たちは民主主義の元で、脱原発を声高く訴えてゆく時なのです。半年前にこの国で起こったことは、二度と日本でもそしてどこでも繰り返されてはなりません。そのために一緒に闘っていきましょう。そして一緒に闘っていかなければ、この電力会社の連合に勝つことは出来ません。今まさに脱原発と核兵器のない未来を実現してゆきましょう。ありがとうございました。

◎山本太郎さん

今日は山本太郎です。すごい。すごい人ですね。おそらく、ほんとに命を守りたい。生きていたい。日本人

の気持ちっていうのがここに集まっていると思います。今日は。

3. 11以降、僕の人生も大きく変わりました。それはどうしてかという、生きていたいと思ったんですよ。生きていないとどうしようもないじゃないですか。で、自分一人で生きていてもしょうがないじゃないですか。ここにいる皆さんも、ここにこれなかった世界中の人たちも、生きていないと意味がないんですよ。今、ぼくたちの目の前にはものすごい危機が迫ってきていると思います。とにかく今生きのびるためには、原発をいっせいで停止するしかないと思うんです。でも、やはり目の前の利益を守りたいものたちにとって、その発言は目障りだと思うんです。でもぼくたちは違いますよ。命がかかってますから。

テレビ新聞で、ほんとうのことというのは、ほとんど流れないと思います。完全にお金ですよ。去勢されて骨抜きにされていると思います。目の前の命よりもお金のほうが大事なんですよ。そして今ここまでいろいろなことがあって明らかになったこと。それはいまの日本の政府が、人々の命を簡単に無視できる政府だということなんです。

今ぼくたちがこうやって集まっているあいだにも、被曝し続けている人たちが居ます。でもそのことをはっきりと伝えて動きに出来る政治家というのはどれくらい居るんでしょうか。政治家達に世の中を変えれるということは、もうない話だということがはっきりとしていると思います。一刻も早い高濃度汚染地域からのサテライト疎開させる。そして原発をいっせいで停止させる。もう代替りのエネルギーはあるんです。電力は足りてるんです。30パーセントのエネルギー。原子力からはいらぬ。でないとぼくたちが生きていくことが出来ないんです。世界中にも迷惑がかかる。とにかく生きのびたいんです。みんなで。いまできること。一番必要なのは市民の力なんですよ。今大人たちがすべきなのは、行動すること。ぜひ力を貸してください。原発反対。子どもを守れ。大人を守れ。命を守れ。地球を守れ。原発反対。頑張ってください。

◎ ハイロアクション 武藤類子さん

福島皆さん。どうぞ一緒に立ち上がってください。皆さん今日は。福島から参りました。今日は福島県内から、それから避難先からたくさんバスを連ねてやって参りました。はじめて集会やデモに参加する人もたくさんいらっしゃいます。それでも、福島原発で起きた悲しみを伝えよう。私たちこそが、原発いらぬの声をあげようと、声をかけあいやってまいりました。

はじめに申し上げたいことがあります。3. 11からの大変な毎日を、命を守るためにあらゆることに取り組んできたみなさんひとりひとりを、深く尊敬いたします。それから、福島県民に温かい手を差し伸べ、つながり、様々な支援をしてくださった方々にお礼を申し上げます。ありがとうございます。そして、この事故によって、大きな荷物を背負わせることになってしまった子供たち、若い人々に、このような現実を作ってしまった世代として、心からあやまりたいと思います。本当にごめんなさい。

皆さん、福島はとても美しいところです。東に紺碧の太平洋をのぞむ浜通り。桃、梨、りんごと、くだもの宝庫中通り。猪苗代湖と磐梯山のまわりには黄金色の稲穂が垂れる会津平野。そのむこうを深い山々がふちどっています。山は青く、水は清らかな私たちの故郷です。3. 11原発事故を境に、その風景に、目には見えない放射能が降りそそぎ、私たちはヒバクシャとなりました。

大混乱の中で、私たちには様々なことが起こりました。すばやく張りめぐらされた安全キャンペーンと不安のはざまに、引き裂かれていく人と人とのつながり。地域で、職場で、学校で、家庭の中で、どれだけの人々が悩み悲しんだことでしょうか。毎日、毎日、いやおうなく迫られる決断。「逃げる、逃げない」「食べる、食べない」「洗濯物を外に干す、干さない」「子どもにマスクをさせる、させない」「畑をたがやす、たがやさない」「なにかに物申す、だまる」様々な苦渋の選択がありました。そして、今。半年という月日の中で、次第に鮮明になってきたことは「真実は隠されるのだ」「国は国民を守らないのだ」「事故はいまだに終わらないのだ」「福島県民は核の実験材料にされるのだ」「ばくだいな放射性のゴミは残るのだ」「大きな犠牲の上になお、原発を推進しようとする勢力があるのだ」「私たちは棄てられたのだ」。

私たちは疲れとやりきれない悲しみに深いため息をつきます。でも口をついて出てくる言葉は「私たちを馬鹿にするな」「私たちの命を奪うな」ということです。福島県民は今、怒りと悲しみの中から静かに立ち上がっています。子どもたちを守ろうと、母親が父親が、おばあちゃんがおじいちゃんが。自分たちの未来を奪われまいと若い世代が。大量の被曝にさらされながら、事故処理にたずさわる原発従事者を助けようと、労働者たちが。土を汚された絶望の中から農民たちが。放射能によるあらたな差別と分断を生むまいと、障がいを持った人々が。ひとりひとりの市民が。国と東電の責任を問い続けています。そして、原発はもういらないと声をあげています。

私たちは今、静かに怒りを燃やす東北の鬼です。私たち福島県民は、故郷を離れる者も、福島の地にとどまり生きる者も、苦悩と責任と希望を分かち合い、支えあって生きていこうと思っています。

私たちとつながってください。私たちが起こしているアクションに注目してください。政府交渉、疎開裁判、避難、保養、除染、測定、原発・放射能についての学び。そして、どこにでも出かけ、福島を語ります。今日は遠くニューヨークでスピーチをしている仲間もいます。思いつく限りのあらゆることに取り組んでいます。私たちを助けてください。どうか福島を忘れないでください。

もうひとつ、お話ししたいことがあります。それは私たち自身の生き方、暮らし方です。私たちは、なにげなく差し込むコンセントのむこう側の世界を、想像しなければなりません。便利さや発展が、差別と犠牲の上に成り立っている事に思いをはせなければなりません。原発はその向こうにあるのです。人類は、地球に生きるただ一種類の生き物にすぎません。自らの種族の未来を奪う生き物がほかにいるのでしょうか。私はこの地球という美しい星と調和したまっとうな生き物として生きたいです。ささやかでも、エネルギーを大事に使い、工夫に満ちた、豊かで創造的な暮らしを紡いでいきたいです。

どうしたら原発と対極にある新しい世界を作っていけるのか。誰にも明確な答えはわかりません。できることは、誰かが決めた事に従うのではなく、ひとりひとりが、本当に本当に本気で、自分の頭で考え、確かに目を見開き、自分ができることを決断し、行動することだと思ふのです。ひとりひとりにその力があることを思いだしましょう。私たちは誰でも変わる勇気を持っています。奪われてきた自信を取り戻しましょう。そして、つながること。原発をなお進めようとする力が、垂直にそびえる壁ならば、限りなく横にひろがり、つながり続けていくことが、私たちの力です。たっただいま、隣にいる人と、そっと手をつないでみてください。見つめあい、互いのつらさを聞きあいましょう。怒りと涙を許しあいましょう。今つないでいるその手のぬくもりを、日本中に、世界中に広げていきましょう。私たちひとりひとりの、背負っていかなくてはならない荷物が途方もなく重く、道のりがどんなに過酷であっても、目をそらさずに支えあい、軽やかにほがらかに生き延びていきましょう。ありがとうございます。